第1節　資料館における展示・情報公開活動

1．第36回企画展『情報求む！～収蔵庫に眠る由来不明の考古資料たち～』を開催

当館には、本学構内遺跡出土資料の他に、主として小野忠熙氏が本学在職中に山口県内の遺跡調査を担当した際に出土した資料の一部や、本学学生が各地にて採取したと見られる資料を多量に収蔵している。これらの大部分は、本学が新制大学として設立された翌年の昭和25年から昭和30年代にかけて採取されたもので、当館設立後に収蔵庫に集約された経緯を持つ。

このうち、正式な発掘調査を経て出土した資料は、一定の情報が付加されているものがあることから、見島ジーコンボ古墳群出土資料をはじめ漸進的に整理とともに調査研究を行っているが、発掘調査を経ず採取された資料の多くは情報が欠落しており、死蔵状態となっている。

当時小野氏とともに採取に係わった学生は、60代後半から80代となっているはずであり、存命の方も多いと予想されるため、当企画展では、死蔵状態の資料を対象に、遺存状態が良好であるもの、断片的な情報が付加されているものをピックアップし、一般公開することによって、資料に関する情報収集を行うことを目的とし、平成26年7月22日（火）から、本学ホームカミングデー（卒業生や退職者を本学に招くイベント）が開催される10月19日（日）までの期間で開催した。

情報収集の方法としては、展示室内に情報提供ノートを設置し、メールによる情報提供も呼びかけた。また、初の試みとして展示解説パネルをweb上に公開し、展示見学に来られない方へも情報提供を求めた。公開した資料の詳細や情報収集の結果に関しては次年度の付篇で報告する予定だが、寄せられた情報は少なかったものの、少数ではあるが一定の情報を得た資料が存在したことは大きな成果であった。観覧者からは、「今回のようにまだ眠っている資料があれば見たいです」などの声が寄せられた。

最後に、展示期間中にマスメディアによる取材を受け、本学の学術資料管理の不備が報道されたことに対する当館のスタンスを述べておく。当館としては、収蔵資料に対する責任を果たす爲の開催であったが、図らずもかつて本学が犯した無責任な行為を世に晒すこととなった。報道によると他大学考古学教員より「地方の考古学研究の拠点としてあり得ない」とのコメントが寄せられたようだが、大学・自治体問わず全国的に由来不明の資料を死蔵している状況は十分に「あり得る」し「ある」。教育研究を司る大学は現状を隠蔽することなく、自省を込めつつその責務を果たすべきと考えるが、いかがであろうか。

写真1　第 36 回企画展ポスター

写真2　展示の模様

2. 山口県大学ML連携特別展　共通テーマ「発見」

当事業は、平成25年度に山口県内大学博物館・図書館連携へと転換を図ったが、その2年目となる平成26年度事業は、平成25年度から新たに2大学3館（岩国短期大学付属図書館・東亜大学附属図書館・山口大学医学部図書館）の参加があり、11大学15館での開催となった。

当年度は、10月から1月までの間に各館が最低2ヶ月の期間を設定し、「発見」を共通テーマに展示を開催することとなった。当館は『新発見資料から歴史を知る～山口大学発掘調査速報展2012-2013～』と題し、平成26年11月3日から平成27年1月30日までを会期として、数年に一度開催している発掘調査速報展を実施した。展示対象とした調査は、平成24年度から翌25年度に吉田構内にて実施した発掘調査3件（①図書館改修工事及び環境整備工事に伴う本発掘調査、②獣医学国際教育研究センター新営工事に伴う本発掘調査、③第1武道場耐震改修その他工事に伴う本発掘調査である。

展示では、「未だ調査中であること」「今後遺跡や出土品の評価が変更される可能性があること」を解説パネルに明記した上で、③調査で出土し、保存処理を終えたばかりである弥生時代の竹製網代編み製品や、①③調査で出土したものの、未だ接合作業中である弥生時代から古墳時代にかけての土器や石器を中心に、展示を構成した。

会期中、345名の方々に観覧いただいたが、観覧者からは、「調査中の臨場感があって面白い」「何も出土しないことも調査成果の一つであることが分かった」などの声が聞かれ、展示品ではなく、埋蔵文化財調査自体に興味を示す方が多かったことも本展の特徴であった。

この展示に関連し、本学姫山祭（大学祭）開催日をオープン日としたことから、図書館1階カフェコーナーにてオープン記念ワークショップ「網代編み体験」を開催した。こちらは事前広報が不足したためか、約10名の参加にとどまったが、それぞれ熱心に取り組んでいた。

当事業の実施に際し、筆者は事務局企画担当者として未参加館への参加要請、参加館の展示視察やポスターチラシ作成、報告書編集などを担当することから、昨年度同様自館の展示が疎かになったところがある。早期の展示準備の必要性を痛感しているが、次年度共通テーマが年度末に決定されること、年度中の発掘調査の多寡は調整不能であることなども原因となり、対応に苦慮している。当事業の継続性が確立した段階で、事務局から離脱する方針である。

写真3　展示の模様

写真4　ワークショップの模様

3．第3回山口大学所蔵学術資産継承事業成果展「宝山の一角」を共催にて開催

平成24年度より、山口大学所蔵学術資産継承検討委員会が主催する事業成果展『宝山の一角』共催館として、展示空間の提供と展示設営協力、会期中の管理運営を行っている。

第3回となる平成26年度も、例年通り前期・後期の2部構成となり、前期展は山口商工会議所主催の「山口お宝展」への参加企画も兼ね、平成26年2月28日（土）から4月24日（金）まで、後期展は5月7日（木）から6月30日（火）までの会期で開催した。

前期展では、当館所蔵見島ジーコンボ古墳群出土資料とともに、山口県の鉱物・岩石標本（理学部所蔵）、植木茂作銅版レリーフ『トリ』（教育学部所蔵）、河井寛次郎作品（経済学部所蔵）、文書「山田顕義宛楫取素彦書簡」と『長防臣民合議書』（図書館所蔵）を、後期展では世界遺産ポトシ鉱山産鉱石（工学部所蔵）、ツキノワグマ交連骨格標本（共同獣医学部所蔵）、山口県出土古墳時代鉄刀（人文学部所蔵）、典籍『塩梅記』と『平家物語　長門本』（図書館所蔵）を公開した。

前期展では554名、後期展では412名もの方々に観覧いただき、本学学生や地域の方々の関心の高さがうかがわれたが、新入生フレッシュマンセミナーや一般教養科目での活用が目立った。専門外の史資料が多く、観覧者からの質問に適切に回答できないことも多かったことをお詫びしたい。一方で、当館所蔵品だけでなく、他部局所蔵の貴重学術資料を展示することから、団体見学受け入れ時には入館者数に制限を設けるなど、資料の安全には最大限の配慮を行った。

観覧者からは、「山大にしかないものをどんどんアピールして、誰でも見られるような企画展をしていただきたい」「大学にある学術資料を、分野ごとにたびたび展示してほしい」「幕末や鎌倉時代の歴史を感じられるものを展示して欲しい」などの声がアンケートを介して寄せられた。

3回目となる『宝山の一角』展は毎年約1,000名の入館者を数えており、学内外に定着しつつあるように思われるが、当展示はあくまで「本学より予算配分を受けて実施している学術資料の保存・修復・管理事業に関する説明責任と可視化の一環」である。学術資料の保存・修復・管理・継承の必要性を学内に定着させることが本来の目的であり、そのための手段が成果展示であることを忘れないでおきたい。

周知のとおり、資料の保存と展示行為は矛盾関係にある。展示会場を管理する当館としては、多くの方々に観覧いただけることに喜びつつも、資料が危険状態にあることを忘れぬよう自戒していきたい。

写真5　前期展ミュージアムトークの模様

写真6　後期展ミュージアムトークの模様

4．歴食JAPANサミットプレ大会に参加

平成22年（2010）、山口商工会議所山口名物料理創出推進会議、財団法人山口観光コンベンション協会が中心となり、食文化研究家の江後迪子氏が監修を務め、明応9年（1500）に大内義興が室町幕府10代将軍足利義稙を招きもてなした記録『明応九年三月五日将軍御成雑掌注文』の献立、32膳（25献＋2供御＋4御台＋御菓子）が再現された。翌平成23年（2011）より、山口市の旅館やホテルにて再現料理が「平成大内御膳」との名称で提供されることとなったが、再現料理に深く係わったやまぐち歴食研究会幹事の北島大輔氏から、『歴食JAPAN　サミットプレ大会』なるイベントが山口市にて開催されるので、当館が実施している公開授業『古代人の知恵に挑戦！－古代のお米をつくってみよう－』の成果を展示してもらいたいとの依頼があった。当館の公開授業はこれまでにも成果展示を実施していることから準備が容易であること、イベントが半日で負担も少ないことなどから、出展協力することとなった。

イベント運営主体である歴食JAPAN事務局（山口商工会議所内）によると、『歴食』の定義は「日本全国の歴史的なストーリーを有した、価値ある食」であり、「地域の「食」のルーツを知り、地域の歴史を知る。そして、各地域が連携し、日本の食の新ジャンルとして、「歴食」を日本全国、世界へ発信する」ことを目的とするそうである（歴食JAPANweb　http://reki-shoku.jp/　による）。

イベントは、平成27年2月28日（土）の12時30分から17時10分までの間、ニューメディアプラザ山口（山口市熊野町1-10）にて開催された。当館はロビー〈歴食交流広場〉のブースにて「弥生の米づくり」と題して、公開授業に用いている復元弥生土器、臼と杵、穂摘み具、解説パネル等を展示した。隣には横浜市歴史博物館による古墳時代の米の調理方法を紹介する「大おにぎり展」が設置されており、さらに奈良パークホテルの「天平の宴」、山口市教育委員会の「大内氏の宴」と続いており、一定の学術性が持たされていたが、来場者の多くは古代グッズ販売ブースに注意を向けており、学術的な展示に足を止める人は少数であった。また、ホールで集団によるダンスが始まるなど、落ち着いて展示を観覧する雰囲気ではなかったこともあり、予定より早く撤収に取りかかった。

イベントの主旨は当館としても何ら意に反するものではなかったが、当事業はあくまで商工会議所のイベントであり、集客や商業に力点が置かれることは事前に想像すべきであった。今後同様のイベントが開催され、参加依頼があった場合は、具体的な内容を吟味して参加の可否を決めていきたい。

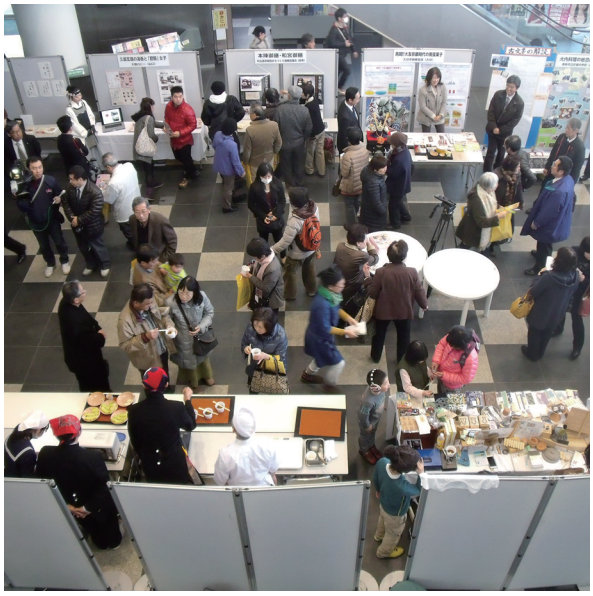

写真7　会場の模様

写真8　当館のブース

５．平成26年度刊行物

1.『山口大学埋蔵分解資料館年報－平成23年度－』を刊行

平成26年度は、平成23年度に実施した構内遺跡発掘調査概報と資料館活動報告を所収した年報を刊行した。発掘調査関係としては、本発掘調査1件（吉田）、予備発掘調査1件（光）、工事立会11件（吉田7・白石2・小串1・光1）の成果が掲載されている。

館の活動報告としては、展示・公開活動として3件の企画展示等事業と、1件の社会教育活動、当該年度刊行物3冊を報告している。その他、横山成己による「山口市筈倉古墳の出土遺物」、吉田生物研究所による「山口県筈倉古墳出土金属製品成分分析調査」と題する付篇を所収している。

2. 館蔵資料調査研究報告書3『見島ジーコンボ古墳群　第128・137号墳出土資料調査報告』を刊行

平成22年度から開始した事業で、引き続き見島ジーコンボ古墳群の出土資料調査及び報告書の刊行を実施した。

平成25年から平成26度にかけて、第128・137号墳を対象に、当館と萩博物館の収蔵資料の悉皆調査を実施し、その成果を収録した。また『見島総合学術調査報告』（山口県教育委員会　1964）には第137号墳の遺構図が未掲載であったことから、平成25年7月25・26日に現地で測量を行い、これを掲載した。

3. 山口大学埋蔵文化財資料館通信　第25号『てらこや埋文』を刊行

平成18年(2005)より刊行を開始した広報誌であり、当初季刊で刊行していたが、平成23年度以降は年度末に1度の刊行となっている。巻頭からには2頁にかけて平成26年度に実施した吉田遺跡の本発掘調査略報を、3頁から4頁には展示活動、5頁には公開授業の模様、6頁には「資料館この一品」として長崎県対馬市採集の縄文時代の石斧を、7頁には当館技術職員の連載である内業業務紹介を掲載した。

当館は現状で実施年度の4年後に年報を発行していることから、本冊子は速報性のある刊行物として重要な役割を果たしている。今後も年度末の刊行を継続したい。

4. 山口県大学ML（Museum・Library)連携事業報告　平成26年度展示テーマ『発見』を刊行

平成22年度より実施している山口県大学ML連携の事業報告書は、事務局企画担当である筆者が編集し、当館が発行している。平成26年度は、前記したとおり11大学15館が参加し、一定期間テーマを共通とした学術資料展示を各館にて開催した。一般の方は入手困難と思われるが、山口県大学ML連携事業公式web（http://www.oai.yamaguchi-u.ac.jp/ml/）にてデジタル公開を行っている。

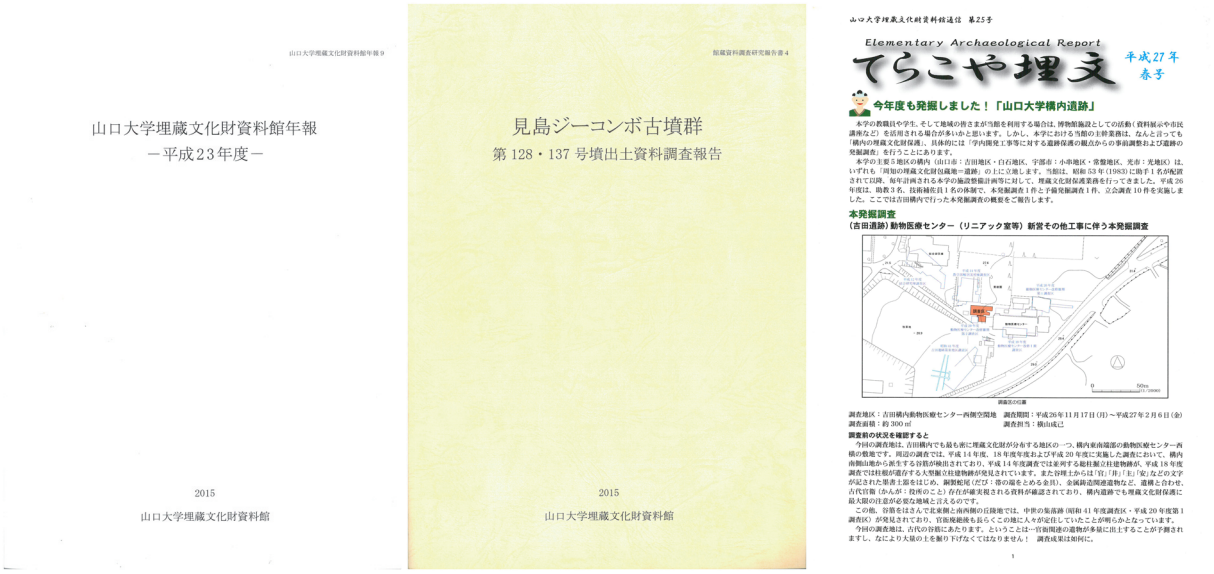

写真9　平成 26 年度埋蔵文化財資料館刊行物